

乳がんの診断 2026.2



現在日本では年間約 10 万人が乳がんと診断されています。年齢は 60 代後半がピークでその後徐々に減少しています。

乳がんは女性がかかるといわれるがんの中で最も多く、今日では 9 人に 1 人が乳がんと診断されています。

乳がんの診断にはさまざまな方法がとられています。乳がん学会の日本乳がん登録データでは、乳がん患者の 6 割以上が自分で乳房に何らかの異常を見つけてがんの発見につなげており（自己発見乳がん）、検診発見乳がんの約 2 倍となっています。早期（2 cm 以下）で見つかるケースも多くなっています。

厚生労働省も自己検診をさらに有効にするために、

- ① 自分の乳房の状態を知る
 - ② 乳房の変化に気をつける
 - ③ 変化があったらすぐに受診
 - ④ 40 歳になったら 2 年に 1 回乳がん検診を受ける
- といった乳房を意識する生活習慣（ブレスト・アウェアネス）の啓発に努めています。

乳がん発見のために現在行われているメインの検査は、MMG（マンモグラフィー）と超音波検査（エコー検査）です。

MMG が 40 歳以上を対象としているのは、特に日本では年齢が若いほど乳腺が高濃度に映る乳房が多く診断が困難であるからです。（高齢になるほど低濃度に映る脂肪量が多くなり異常を判別しやすい）。MMG のメリットは、数は少ないもののがん特有の微小石灰化のみを所見とする乳がんを発見できることです。

超音波検査は、ほとんどのがんでみられる異常像（しこりなど）を MMG よりも確実に検出できます。超音波検査の欠点は検査に熟練を要することです。

金山病院乳腺外来では、現在 MMG は機器の更新がかなわず検査できないので、車載検診や他病院の MMG 結果を利用し、超音波検査、乳房造影 MRI 検査などを行って、確定診断のために細胞診や針生検を行っています。